

「なあ、おもしろいとこ見つけたんだ。帰りに寄っていかないか」

井上がその話を持ちかけてきたのはちょうどホームルームが終わった直後——一日の疲れを体を感じ、さあ帰ろうかというその瞬間——だった。井上は一種のトラブルメーカーではあるけれども、その被害は必ず僕がこうむるといふ迷惑千万な性癖（能力）の持ち主であった。しかし、それでいて彼の持ちかけてくる話はどこか魅力的だった。

「どこに？」

「井戸」

「は？」

井上の微笑は、ある面で悪魔的な笑みだ。いたずらっぽいや、見ていると引き込まれそうなスマイル。この井上スマイルに何度騙されたことか。

「いど、イド、井上の井に引き戸の戸。用途は主に水を汲み上げる……」

「わかるよ、それぐらい。で、どこから井戸がわいてきたのかな？」

それが、と井上は言った。街を歩いているときに、たまたま三丁目の廃屋のそばを通りかかったのだという。

「あそこ……今は草がボウボウだろ。で、草むらの中に灰色いものが見えたんだ」

いつも思うが、今の時代、井上は希少な人種だと思う。好奇心と行動力の権化と云っていいほどだ。勿論、彼はパソコンもするし、ゲームもするし、勉強も一応している。それなのに、気付けば井上は街を歩いている。そして何故か必ず、彼曰く「おもしろいもの」

——僕にとってはトラブルの種——を見つけてくる。フィールドワークは時代錯誤であるのかもしれない。家の中にいるだけで、ネット、新聞、テレビ、電話、様々な情報を手に入れることができる。だけど、たまにはこういう人間が一人くらいいてもいいんじゃないか、と思う。自分の足で街のすべてを知ろうとする人間がいても。おそらく彼のこの町についての情報は、辞典一冊は書けるぐらいあるだろう。それに、街は常に変化している。だから井上のフィールドワークは、街という生き物の成長を観察するためのものなのかもしれない。

「今までは気付かなかったんだけど、それが近付いてみると井戸だった。古井戸。木の板

で蓋がしてあった。……秘密の匂いがあるだろう？」

僕は平静さを保ちながら言った。既に心の奥は好奇心でいっぱいだった。だが、悪魔の誘いに簡単に乗ってしまったてはいけない。

「へーえ、それで？」

井上が見つけてくるものは、どことなく懐古的だ。僕自身が経験したわけでもないのに何故か懐かしいと感じてしまうような、昭和のメロディーのようなものばかりだ。例えば誰かが昔使ったであろう、崖をくりぬいて作った秘密の隠れ家、街外れにある古びた廃屋とかだ。僕はどうもそういうものに魅了されてしまうらしい。

「板の隙間から覗いてみたら、すごく深かった。本当の暗闇ってああいうのをいうんだろ  
うな。蓋の隙間から洩れる光でも、底は見えなかった。だから……」

「底を調べるために、ロープをつけて中に入るとかいうんじゃないだろうね」

「いや、違う。そんなこと考えてもなかった。考えてたのは、誰かあの井戸について詳しいことを知っている人を探そうと思っただけさ。ふむ。井戸の中に入る、ね。なかなかおもしろそうじゃ……」

「頼むからやめてくれ」

「じゃ、今日を見るだけな。井戸に入るのはまた今度で」

「今度じゃねえよ」

僕の言葉が届いたか届かないかのうちに、既に井上は教室を出ていた。慌てて僕も廊下に飛び出す。逃げ足の速い野郎だ。井上はもうどこにも見当たらなかった。

校門を出てから、二十分ほど歩いたところにその「廃屋」はあった。窓ガラスこそ割られていないものの、荒廃した庭をひと目見ればそこに人が住んでいないのは明らかだ。先に着いているはずの井上の姿は見えなかった。

「おかしいな……」

口で言ったほど不思議ではなかった。井上が道草をしたのは一度や二度ではない。とりあえず、僕は壊れた門を通って中へ入った。

番町皿屋敷のお菊さんでもいればびったしの紛れもない古井戸だった。蓋といっても、ボロい板切れが並べてあるだけで、本当にお粗末なものだった。

番町皿屋敷、というのは、お岩さんの次ぐらいに有名な（それも昔の話か）国産幽霊話のはずだ。腰元だったか女中だったかの菊が武士の青山播磨と恋仲になるも、青山を試すために故意に家宝の皿を割るのだ。青山は菊を一度は許すのだが、真実を菊が打ち明けた

とき、試されたことを知って逆上し、菊を斬り捨てる。お菊の死体は井戸に放り込み、蓋をしてしまった。ところがそれからというもの、夜な夜な井戸から皿を数える声が聞こえ……という話だったと記憶している。

井戸は人の想像力をかきたてるというのもよくわかる。その深さ。昏い水底。なにか異形の者が潜んでいてもおかしくないよう不思議な空間。井戸が現れる話は古今あわせて意外に多いのではないか。

僕も、好奇心に従って、板と板の隙間から中を覗いてみた。隙間から射しこんだ光が水に反射して、細い白い線が揺らめいているように見える。それ以外は、中は暗黒。

あれ？

なにか井戸の底に光るものが――

「なにをしとる」

急に後ろから声がしたので、とっさに反応できなかった。狼狽しながら振り向くと、そこには五十代から六十代ぐらいひよつとすると七十代以上の老人が立っていた。ホームレスのような格好をしているが、どことなく気品に溢れているような雰囲気を放っていた。

「あ、あなたは？」

「わしか？ わしはここらじゃ『老人』と呼ばれておるな」

確かに『老人』という名前がしっくりくる老人だった。

「で、ここでなにをしてた」

「いえ、隙間から井戸の底を覗いてました」

「なにか見えたかね？」

「さつき、なにかが光ったんですけど」

老人は井戸のほうを一瞥すると、ふむ……と考え込んだ。僕はいったいなにかあるのか気になってしょうがなかった。

「この井戸、なにかあるんですか……？」

老人は言った。僕がその言葉を認識するのにはだいぶ時間がかかった。

「この井戸はな、……人を喰う」

聞くとところによると、この井戸は「過去」の象徴なのだという。昔を懐かしがったり、人生に後悔しているものが、この井戸を覗くと、その「過去」が見えるらしい。「あの頃に戻りたい」という考えを抱いている者には、そのビジョンがひどく魅力的なのだ。そし

である日、ふと、飛び込みたくなって――。

そういう風に、井戸は獲物を呑みこむのだという。

「この井戸に底は無い」

底は柔らかい泥の段になっていて、死体はゆっくりと泥の底に沈んでゆくのだという。そのまま二度と死体は上がってこない。何人この井戸の底に埋まっているのか検討もつかんよ――と老人は言った。底無しの人喰い井戸。俄かには現実とは判断しがたい。だが、井戸から漂ってくる空気が暗鬱なる雰囲気をかもしだしている。どことなく僕は老人の話を感じかけている。

「どうして、井戸は人を呑みこむんですか」

「わからん。もしかしたら、井戸自身が『過去』を望んでいるのかもしれない。だから過去を求める人々を呼び寄せるのかもな」

「……………」

「この井戸は本当に過去につながっているのかもしれない。遠く、失われてしまった、幸福だった頃の記憶に…………」

二人とも押し黙った。僕は過去を求めているのだろうか。そこまで求めるべき過去が僕にあったのだろうか。わからない。すると、急に寒気が僕を襲ってきた。今は夏だ。それなのに冷水を浴びせ掛けられでもしたかのように、鳥肌が立った。寒い。老人はそれに気付いていない。何故、どうして寒いんだ？

「あれ、早かったじゃないか。もう来てたのか」

僕は振り向いた。寒気はどこかへ飛んでいった。井上だった。井上は不思議そうな顔で僕に尋ねた。

「中、覗いてみた？」

「うん、覗いてたらこの人が――」

「誰が？」

老人は、いつのまにかいなくなっていた。

僕は、出会った奇妙な老人のことを井上に話した。井上は、老人に興味を持ったみたいで、「どうして俺が来るまで引き止めておかなかったんだよ」と無茶を言った。その後、井戸を覗いたり辺りを探索を試みたりで、井戸が紛れもない古井戸であることがわかった。僕らはこの奇妙な遺跡に惹きつけられ、また来てみようということになった。

ある日のことである。僕は、ひとりでこの井戸を見にきた。案の定、誰もいなかった。僕は井戸を覗いた。井戸の底にはなにかが光っていて、ときどき形を取りそうにはなるのだけれど、結局形にはならない。すると、急に物音がした。僕は別にやましいことはなかったのだけれどとっさに隠れた。草むらから見てみると、それはいつぞやの老人だった。老人は、なにかに疲れたような顔をして井戸を覗き込んだ。老人は、井戸の中に自分の過去を見ているのだろうか。それが見えるということは、老人は今、人生に疲れているのだろうか。僕は音を立てなかった。と、老人はいきなり蓋をよけ始めた。板切れを次々と放り投じている。——まさか！僕は老人に声をかけた。

「なにを——しているのですか」

老人は僕に気付き、夢うつつのような顔から正気に返った。

「君は、いつぞやの——」

「今、いったいなにを……」

老人は黙り、それからぼつりと一言洩らした。

「疲れたのさ」

「……わしは昔、一介の中小企業の社員だった。普通に生きて、普通に死ぬ。そんな一生を終えるはずだった。そんなわしの人生にも楽しいことはあったさ。恋愛もした。仲間もいた。わしはちやうど二十代の半ばで結婚した。恋愛結婚だった。子供も生まれた。振り返ってみれば、ちやうど幸せの絶頂だったよ。あのころは。

晴天の霹靂。そんな言葉がある。わしらの場合はまさにその言葉通りだった。

ある日のことだ。妻は幼い子供たちと共に家にいた。その日、妻はたまたま会社が休みだった。妻と子供たちは夫であるわしの帰りを待っていた。午後六時にもなろうかというときに、宅配便を名乗る男が来た。妻は扉を開けた。男は宅配業者を装った強盗だった。男は妻を縛り上げると、金品を要求した。妻は逆らわずに、言われるままにした。逆らえば子供の命が危ないからだ。あのときの彼女の最優先事項は、いかにして子供を守るかだったのだ。だが、男は妻のそんな態度に気付くと、加虐心からか、三人の子供を血祭りに上げた。わしが家に帰ったとき見つけたのは、子供たちの無残な姿と、縛られたまま発狂していた妻だった。……妻はあの後自殺した。

犯人は程なくして捕まった。わしはその男の一言一句を聞いてはらわたの煮えくり返る

思いだったよ。わしは復讐を誓った。でき得る限りの恐怖を男に与えてから殺してやりたかった。

裁判が始まると、わしは傍聴席にいた。懐には、秘密裏に購入した拳銃を潜めて。男が証言台に立ち、自分は無実だと言った瞬間引き鉄を引くつもりだった。だが、奴の言葉に呆れ果て、わしは銃を取り出すことさえも忘れた。弁護士、わしら家族への責任転嫁、捻じ曲げられた真実、被告の自分勝手な抗議、なにからなにまでが癪に障った。男だけではなく、すべてが憎かった。……わしはすべてを棄てたよ。会社の地位も、生活も、過去もなにもかも棄て——今ではこんな暮らしをしておる」

老人は深く息を吐き出す、と一言、疲れた、と言った。

「わしはやがてこの井戸のことを知ることになった。過去を映す井戸だということに気付いたのは当然だったよ。わしはもう、現在に生きているのではなかったから——」

僕はなにも言えなかった。

「昨日だった」

老人はぼつりと言った。

「え？」

「昨日だったよ。古い友人から聞いたんだが、あの男が自殺したんだ。あの——恨んでも恨みきれないあの男がね。首を吊った」

あの——老人の妻子を殺したというあの男？

「わしは——なにを憎めばよかつたんだろうか？ あの男をか？ わしも考えたよ。あの男を憎むのは確かに簡単だ。それで妻たちが生き返るわけではない、とかなんとかきれいごとを並べるわけじゃない。だが、金で男のために弁護を引き受けた弁護士。あいつはなんの罪も無いといえるのか？ 口からでまかせを並べ立て、わしの家族を侮辱した——死者を侮辱したんだぞ。金のために死者を侮辱することは許されることなのか？ なにも言えない死者に責任を転嫁させるのは許されることなのか？ あの男の言い分を肯定するわけじゃないが本当にあの男だけのせいだといえるのか？ あの男が狂っていくのになんの理由もなかったのか。あの男を歪ませた原因がなにも無いとでもいうのか。あの男の家庭や、職場、男の育ってきた場所になんの歪みも無いというのか。無責任に同情を煽るワイドショー、男の異常さだけを報道する新聞、他人の不幸を喜び、ひそひそとせせら笑う隣人たち。この世界のどこが歪んでないといえるだろう？ わしはもう、疲れた。だからわしはすべてを忘れたのさ」

「……………」

下手な相槌をするつもりはなかった。そんなものは無意味なのだろう。老人は聞き手である僕さえも必要としていなかった。

「でも、すべてを忘れたと思っても所詮は人間さね。唯一気がかりだったのはあの男の行く末だよ。あの男がどんな死に方をするのか見届けるまでわしは死ねなかった。思えば皮肉な話だよ。憎いあの男だけがわしを現実に繋ぎとめていたんだからな。だが、それももう——おしまいだ」

老人は、おずおずと立ち上がった。

「わしのことを知る者はもう、ほとんどいない」

そして、ゆっくりと古井戸へ近付いていく。

「妻が死んでからのわしの人生は夢でしかなかったようだ。今でもこう思うことがある。わしはまだ夢を見ているのではないだろうか、これは長い夢ではないのか、眼が醒めればあの日常に戻れるのではないのか——」

……夢の中では、いつもわしはあの子らを見て、微笑んでいるんだ。だが、子供たちに近付けば近付くほど距離は離れていく。夢の終わりごろになってようやくあの子らに手が届きそうになるんだ。手が届こうとしたその時——眼は醒める。いつもこんな夢だ」

老人の顔には表情といえるものはほとんど無かった。あったのは、ただ深い年月を重ねた皮膚があるのみだった。

「なにが、いけなかったのだろう。わしはなにか悪いことをしたのか？ どうしてこんなにもわしの人生は歪まねばならなかったのだろう」

本当にわしが悪かったのかもしれないな、と自嘲的に笑った。

「つまらないことを聞かせて、すまないね」

「……………」

老人は最後の板切れをどけ、井戸の縁に手をかけた。

「ただ、誰もわしがここに眠るのを知らないのは悲しすぎると思ったから——」

老人は井戸の中に体を躍らせた。

もし僕が彼の体を掴みそこなっていたら、まさしくその通りになっていたのだろう。

老人は、現実を引き戻され、放心したように僕を見つめていた。

「君は……」

呆れたように老人は言った。それから、力なく笑った。

「わたしは、賭けに失敗したのか……」

「賭け？」

老人はまた、力なく笑って言った。

「そう、賭けだったんだ。誰かに洗いざらいなにもかも話して——その誰かがわたしを止めなかったら身を投げるつもりだった。死の理由を肯定して欲しかったから、だろうな」

「じゃあ、止められたらどうするつもりで——」

「わたしはまだ死ぬには至らない、とでも考えるつもりでもしていたんだらうかね。もう一年、考えてみようかと思ったんだ」

やがて、老人はなにかを割り切ったように立ち上がった。

「そうだな。もうすこし考えてみよう」

老人にもう死ぬ気が残っていないらしいことを知って、僕はほっとした。

やがて老人は別れを告げると、草むらを後にした。

僕もしばらく草むらにいたが、日が暮れるのと共に家へ帰った。

「ただいま」

僕は誰もいない自分の家に声をかけた。がらんとした沈黙は一瞬かき消されただけで、すぐに元に戻る。一人には、広すぎる。

腹が減っていたので、冷蔵庫の中の買い置きしていた食品を適当に料理して食べた。

僕は二階に上がると、着替えてからベッドの上に倒れこんだ。

僕は「老人」のことで頭がいっぱいだった。勉強など手をつける気もしなかった。

——おそらく、老人にとっては現実はまだの空白でしかなかったのだろう。確かに、現実の歪みは存在する。でも現実には生きていくにはその歪みから眼を逸らさなければいけないのだ。人間には、歪みを見ながら生きていくことなどできないのだ。

眼を逸らすことしかできない。でも、逸らせない。

そんな姿が哀れでならなかった。老人も、僕も。

そのまま仮眠を取ろうと思ったが、なかなか寝付けない。時計はもう一時半を回っていた。



もしかして――

僕は瞳を閉じながら考えた。

あの、老人の言葉は嘘ではなかったのだろうか？

賭けだったんだ。そう言って、老人は力なく笑った。

どちらにせよ、老人は死ぬつもりだったのではないだろうか？

あれは、僕を安心させて井戸から遠ざけるための嘘ではなかったのか？

僕は夕暮れまで、あそこにいた。それくらいは老人もお見通しだったに違いない。老人は僕が深夜まであそこにいることはない、と踏んだのだろう。それは、当たっている。現に僕はここにいるのではないか。その後、老人は近くに隠れることもできた。でも、それをしなかったのは、いつ僕に出くわすかわからなかったからだ。もう一度あの場所で老人を見かけたなら、僕は老人の嘘を看破できたに違いない。だから、老人は僕が安心して帰った後の時間――深夜を選んだのではないのか？

空想は不安に変わる。

――と、音も無く電気が消えた。瞼まぶたを閉じていても、それくらいわかる。

停電か？ 閉じていたので眼は暗闇には慣れていている。薄暗闇の中、僕は机の中から懐中電灯を取り出した。どうやら――地域一帯停電らしい。なにか、胸騒ぎがする。

嫌な予感がした。

僕は月の出る夜道を駆けていた。不気味な月。それは否応なしに死のイメージを喚起させていた。あの時のように。

――どうして僕も連れて行ってくれなかったの。

その言葉が蘇る。だから、あの老人だけは。

死なないで。

僕が廃屋の前に着いたときもまだ、停電は続いていた。廃屋は昼間とは打って変わっておどろおどろしい雰囲気をかもしだし、草むらにも魔物が住んでいるような気配がした。

だが、僕にはそんなこと気にしていられる暇は無かった。

いそいで井戸に駆け寄る。人影は、無い。思い過ぎだったのか――

だが、そんなほっとした気分も一瞬で吹き飛ばされた。

板切れがどこにもない。老人が帰った後、僕は元に戻しておいたのだ。

まさか……。僕はすべてが手遅れだったことを知った。

井戸の横に、老人のものと思われる靴と、書置きのようなものがあつた。

僕は懐中電灯で照らして書置きを読んだ。

『拝啓、名前も知らない君へ。』

まず、お礼を言う。ありがとう。こんな見も知らぬ老いぼれのために体を張って助けてくれたことを感謝する。君の知つての通り、賭けだのなんだのという話は、わたしの言い訳に過ぎない。わたしはもとより、この井戸に身を投げるつもりだつた。だが、ああでもない言わない限りは、君はここを離れはしなかつただろう。君の努力を結局無にしてしまったことについては、申し訳ないとしか言えない。でもわたしはもう過去の人間であり、現在を生きていくにはもう疲れすぎているのだ。決して君の力が及ばなかつたわけではない。わたしは既に、現在に必要とされていない人間なのだ。だから君が気を病むことはない。君が、わたしになにか――誰かを投影しているように見えたのは、わたしの気のせいだつたのだろうか。君の瞳には孤独の翳が見えたような気がしたのだ。

もし、君がわたしの嘘を家に帰つた後にも気付き、深夜にも関わらずわたしの行為を止めさせようとやつてきてこの紙片を見つけたのだとしたら、そしてもしかしてわたしの死を悲しんでくれるのだとしたら、とわたしは思い描く。

だとしても、君は悲しむ必要はない。わたしは大丈夫だ。なんの確信もないが、死は安息であるとなつたしは思う。だから、君は悲しむ必要はない。

ひとつお願いがある。この手紙はわたしの靴の隣に置いてあるだろう。そのわたしの靴を、目立たないようにその草むらに隠しておいてもらえないだろうか。この靴は思いいれがあつたので自分の手で葬るのはしのびないのだ。このわたしのささやかな願いを聞き届けてくれるだろうか。そうしてくれれば、幸いなのだが。

ありがとう。

名も無き老人より

敬具』

僕は、いつのまにか地面に膝をついていた。

幽霊のようにふらふらと立ち上がると老人の書き遺した通りに、草むらに靴を隠した。

僕は言いようのない敗北感を感じていた。

——また置き去りにされた。

打ちのめされた感覚。どうしてみんな僕を置いていくのだろう。どうして。

僕はわずかな望みを持って、井戸を覗いた。口を開けた暗黒。

頼りない懐中電灯で井戸の底を照らそうとするが、光は底まで届かずに深い暗闇に呑みこまれてしまった。

僕は声をかけた。老人と呼ぶのも躊躇ためらわれたので、ただ「おーい」とだけ声をかけた。

それはこだまし、無数の小さいこだまを生んだだけだった。だが——しばらくして、底のほうから「おーい」と声が返ってきた。しかしその声は老人のものではない。この声は――

僕は闇の中に眼を凝らした。でも、見えない。

それは光の中で見ることはできない。僕は懐中電灯のスイッチを切った。闇の中に無数の泡が現れる。それは闇の中でしか姿を見せることはない。

僕が昔の匂いを感じさせるものに夢中になったのは、いつでも過去に戻りたかったからではないだろうか。まだ幸せだったあのころに――

僕は眼をそむけ続けてきた。現実の歪みから。いつでも。

僕はいつでも置いてけぼりだ。

——子供一人残して心中ですって。

——残った子も可哀想よね。

どうして連れて行ってくれなかったの。父さん。母さん。どうして二人だけで死んでしまったの。ねえ、どうして。

でも、この奥から聞こえてくる声は——どこか懐かしい。

見えた。

僕には見えた。闇の中に過去の風景があった。

——僕もいつしか、過去の中に生きていたに違いない。歪みに気付いてしまったから。

老人と同じように記憶の中にひとりだけで生きていたから。

楽になろう。僕は思った。どうせなら、完全に過去の世界に生きていけばいい。

僕は、重力に、身をまかせた。

しかし次の瞬間、僕の体は誰かに掴まれていた。

ここは外からは見えない。それにこの薄暗闇では、なにをしているかわからないはずな

のに。

勢い、僕は地面に引き倒される。

「誰……？」

シヨックのせいで眼はまだ暗闇に慣れていない。

「俺だよ」

僕は慌てて懐中電灯を探したが、どうやら井戸の中に落ちてしまったらしい。僕はその人物の顔を凝視した。

「井上……」

どうしてお前がここに……

「何故俺がここにいるかって？ それは俺が神出鬼没だからだよ」

「どうして、止めたんだ……」

「俺がお前の考え通りに動くと思うか？ そんなことはありえないな」

「そういうことを聞いてるんじゃない！」

僕は思わず叫んでいた。でも井上は淡々と答える。

「虫の知らせ、て奴かな。で、ここに来てみると、お前が井戸の中を覗いてる。飛び込みそうだったが、お前は誰かに止めて欲しいんじゃないかと思った」

そんなことで……。それでわざわざこんなところまで来たっていうのか。

僕は笑いだした。なにもかもが可笑しかった。そうだ、こいつはこういう男なのだ。

「ハハハハ……」

こいつは別に過去がどうか現在がどうか気にする奴じゃないんだ。ただ、なんであろうと「おもしろいもの」があればそれを追い求める奴なのだ。そこに僕がいかに過去を感じ取ろうと、こいつにはまったく関係ないんだ。

「なに笑ってんだよ。気色悪いな」

僕は笑うのをやめない。僕は言った。

「馬鹿だな、お前」

「お前もな」

もう、馬鹿らしくなってしまった。

「じゃ、帰ろうか」

「もういいのか？」

「ああ」

僕を動かしていた強迫観念はどこかへ行ってしまった。僕は老人のことを考えたがこいつの前でその話をするのはやめておこう。そうしたほうがいいと思った。

老人は、寂しかったのだろうか。

いや、違う。僕は否定する。彼の言った通り、彼は過去の中に生きていたのだろう。彼にとつて、現実には意味が無かった。だから彼はこの世を棄てて、永遠の過去の世界へと旅立ったのだろう。でも——それは悲しい。一度二度しか言葉は交わさなかったが、それでも彼には生きていて欲しかった。僕は、彼の死を知る唯一の人間だ。だから、埋葬する場所の無い、彼の記憶もまた僕の中に埋葬されるべきなのだろう。

でも僕は、過去に生きることはしない。それは老人に教えてもらったこともある。井上の言え、過去に生きるだけでは、「おもしろいもの」を見つけることは不可能なのだろう。現在に生きる以上、僕もきつと「おもしろいもの」を探すことで時間を費やすに違いない。だが、そういうのも、まあ、いいと思う。

僕は井上と共に暗い道路を歩いている。相変わらず停電は続いているが、不思議と怖いとは思わなかった。やがて僕の家の前に着いた。

「ありがとう」

僕は井上に礼を言った。

——と、井上は微笑を浮かべ、そのまま薄れて消えてしまった。

僕は眼を見張った。だが、それも一瞬のことで、僕は「おやすみ」と言って、扉を閉めた。まあ、消えてはしまったが、あいつはもともと神出鬼没な奴だ。明日になれば平気な顔で現れるだろう。とにかく、眠い。寝よう……その夜僕は、老人の夢を見た。悲しい夢だった。眼が醒めると、内容はなにひとつ覚えていなかったが、頬は涙で濡れていた。

.....

名前も知らない君。君のことを思い出していた。どれくらい前のことだろうか。僕——わし——でもなくわたし、わたしはそこまで思い出せない。ここでは時間の流れは非常にゆっくりしたものに感じられる。そもそも時が流れているかどうかもわからない。

わたしは勘違いをしていた。別にこの井戸は人を喰うわけではないのだ。ただ、過去を願うエネルギーとでもいえるべきものを喰うだけで。過去を願ってさえいけば、ここで永遠に自分の過去を見続けることができる。ここもそう悪いところではない。この井戸は「真に過去の住人になることを望む者」しか受け入れない。君は心の底では、「助けに来てく

れる者」のことを思っていたに違いない。そして、それは幻想という形をとって現れたのだろう。

わたしのことを悲しむ必要はない。望めば、すぐに記憶の中を旅することができるのだから。妻に会おうと思えば、いつでも記憶の中を訪ねることができる。その中に、君もいる。何度か君に会った。君に会うたびに君のことがわかるような気がする。多分君はここへ来ることはないだろう。本当に心の底から望まない限りは。もし、君がここに来たら、存分に懐かしい話をしよう。君とわたしには似ているところがあると思うから。

——もう、体が骨になって久しい。それでもわたしは死なない。過去を望んでいるからだ。過去に貪欲である限り、わたしは死なない。さて、今日も子供たちに会いに行くことにしよう。元気な、可愛い子供たちのもとへ。

そんなわたしは、非常に幸福だ。だから君も、今日は安らかに眠りたまえ。

〈了〉